

**Augustus Richard Norton, *Hezbollah: A Short History*. Princeton: Princeton University Press, 2007, 187 pp.**

本書の著者アウグストゥス・リチャード・ノートン教授は、ボストン大学国際関係学部に所属し、国際関係論、人類学、現代中東政治、特にレバノン現代政治とレバノン・シーア派を専門とする研究者である。ノートン教授はこれまで30年以上にわたって、時に研究者として時に実務家としてレバノンに関わり続けてきた人物であり、現在までに多くの研究成果を世に送り出してきた。その中での代表作は『アマルとシーア派——レバノンの精神をめぐる闘争』[Norton 1987]であるが、これはレバノン・シーア派の社会変動と政治的動員過程、ならびにアマル運動の趨勢に関する古典的名著である。本書は、著者による初めてのヒズブッラーに関する研究書であり、同党の起源から結党、そして現在に至るまでの期間を対象として、その諸活動、思想、組織、および現代レバノン政治における位置付けなどが包括的かつ詳細に論じられている。

ヒズブッラーに関する先行研究は、同党が世界的な注目を集め始めたこともあり、1990年代後半から2008年の間に一気に充実した感がある(代表的なものとして、[Abū al-Naṣr 2003]、[Alagha 2006]、[Hamzeh 2004]、[Harik 2004]、[Jabar 1997]、[Ranstorp 1997]、[Saad-Ghorayeb 2002]、[Sharāra 2006]などが挙げられる)。本書は、既存の諸研究を総合し、著者独自の視点を加えてそれらを構築し直したのもでもあり、現在までのヒズブッラー研究の到達点ならびに同党の全体像を把握するための格好の書となろう。

本書が対象とするのは、レバノンを舞台に活動を行うシーア派イスラーム抵抗運動／政治組織、ヒズブッラー (Hizb Allāh) である。その名称は、アラビア語で「神の党」という意味を持ち、「神の一党こそ真の勝者となろう」(食卓章第56節)というクルアーンの一節に由来する。ヒズブッラーは1982～1985年の間に徐々に組織を確立していったが、その名と存在が公に示されたのは、同党の最初の憲章『公開書簡 (al-Risāla al-Maftūḥa)』が発表された1985年2月16日であった。その中では、「シオニスト政体の打倒」、「米・仏を中心とする帝国主義的影響力の排除」、「革命による世界的イスラーム国家建設」などを理念的な目標とすることが表明された。

ヒズブッラーはその誕生以降ほぼ四半世紀にわたり、強烈な反米・反イスラエル・反帝国主義を表明し続けると共に、南部レバノンに駐留するイスラエル国防軍 (Israel Defense Force; IDF) に対する抵抗運動／武装闘争を継続し、これまでに多くの「成果」をあげてきた。近年では、2000年5月にIDFの南部レバノンからの無条件撤退を達成し、2006年7-8月には中東域内最強の武力を誇るIDFを相手に武力紛争を行い、政治的勝利を収めるに至った。それらの「成果」は、同じく対イスラエル闘争を中心理念として掲げる他の多くの抵抗運動 (PLO、パレスチナ諸勢力、ハマース、パレスチナ・イスラーム・ジハード運動など) と比べても、突出したものである。その結果として、米国からは「テロリスト集団」とのレッテルを貼られることとなった。

一方でヒズブッラーは、レバノン国内において、同国で最も組織化された近代政党として議会制民主主義に参加したり、独自の社会・福祉・教育活動を展開するなど、統合型イスラーム主義運動としての活動も積極的に展開している。同党はその高いモラルと洗練された戦術、イラン・シリアの援助を受けた潤沢な資金をベースとして、レバノン国内で他に比肩する組織が見当たらないほどの実績を積み重ねてきた。

以上のような複雑な側面を持つヒズブッラーに関して、米国の多くの政策立案者たち、ないしは

一部の研究者たちは、これまで同様に「白か黒かの世界観」に由来する「単純なステレオタイプ」(p. 8.) 的イメージを重ね続けるという致命的ミスを犯してきたと著者は指摘する。そこで著者は、本書の目的として「この複雑な組織に関して、よりバランスのとれた繊細な解説を提供する」(p. 8.) ことを目指すとしている。

本書『ヒズブッラー』は、プロローグと終章を合わせて全8章で構成されている。以下では、各章の具体的な内容について概観していく。

プロローグは、2004年8月に南部レバノンのあるシーア派の村において著者が体験した出来事の語りから始められる。著者は、比較的成功を取めたシーア派中産階級の家で食事を共にした場面を回想しつつ、レバノン・シーア派の置かれた現状や彼らの国際性や多様性に関して思索を巡らし、本章以降の内容に関わる問題提起を行うことで、読者を著書に徐々に引き込んでいく。

第1章「ヒズブッラーの起源と前史」では、主に仏領委任統治からのレバノンの独立(1943年)からヒズブッラー結党(1982～1985年)までの時期を対象として、レバノン・シーア派が経験してきた現代史を概観している。ここでは、レバノン国内で疎外された「奪われたものたち」としてのシーア派コミュニティと、その内部での伝統的な封建エリート(zā'im; pl., zu'amā')と一般民衆の厳格な格差の存在が指摘される。そして、そのような現状の打破を目指した左派勢力が1950～1970年代には一時的に勢いを持ったが、その後のカリスマのウラマー、ムサー・サドル(Mūsā al-Ṣadr, 1928-1978?)の到来と彼の組織したアマル運動(Haraka Amal)によってシーア派コミュニティの政治的・イスラーム的覚醒が進行したことが言及されている。また本章の内容は、主に著者の最初の著作『アマルとシーア派』[Norton 1987]を要約したものとなっている。

第2章「ヒズブッラーの結党」では、ヒズブッラーの結党過程と、その際の思想的基盤に関して分析が加えられている。ここでは、1982年6月のイスラエルによるレバノン侵攻がヒズブッラー結党の直接的引き金となったことや、創設者の多くがイラクのナジャフで研鑽を積んだ若いウラマーたちであり、その多くがムハンマド・バーキル・サドル(Muḥammad Bāqir al-Ṣadr, 1935-80)に直接・間接に師事していた点が指摘される。さらに思想的側面に関しては、ヒズブッラーの『公開書簡』を分析することで、同党が柔軟で巧みな思想を持って誕生したこと、さらには同党が常にアマル運動との対比の中で自身を定義付けしてきたことなどが明らかにされている。

続く第3章「20世紀におけるシーア派ムスリム」は、他の各章とは若干毛色が異なり、イスラーム・シーア派の教義や儀礼に関して、それらとヒズブッラーの諸活動との絡みで考察が加えられている。ここでは特に、アーシューラー(ʿAshūrā)の儀礼(ないしは、吉村慎太郎が「カルバラー・パラダイム」と呼んだもの[吉村 2001: 126])の持つ意味の重要性が指摘される。

第4章「レバノンにおけるレジスタンス、テロリズム、そして暴力」では、主にヒズブッラーの対イスラエル武装闘争に焦点を当てて、その動態や成果、「ゲームのルール」(この表現は著者が[Sobelman 2004]から借用したもの)に関して外観・整理が行われる。ここではまた、米国やイスラエルの「対テロ戦争」の論理や戦略が全く不十分であり、逆効果さえ生み出す結果に終始している点も指摘される。

第5章「政治を弄する」では、主にヒズブッラーのレバノン国内における政治活動や社会活動に焦点をあてて、その戦略や成果を概観・整理している。ここでは、内戦後初の人民議会選挙となった1992年の段階で、政治参加の是非を巡って党内で「激しい議論」が展開されたことや、ヒズブッラーの勢力や支持基盤を判断する上での統一地方選挙(内戦以降は1998年、2004年と2度実施さ

れている)の結果の重要性を指摘している。また、ヒズブッラーが提供している様々な社会福祉活動(建築業、学校、病院、衛生施設、マイクロ・ファイナンス事業など)に関しても言及がなされている。

以上までの章がどちらかと言えば先行研究の概観・再考によって構成されているのに対して、第6章「祝宴から戦争へ」及び終章では、筆者の独自の見解が随所に盛り込まれている。第6章では、主に IDF 撤退(2000年5月)からレバノン紛争(2006年7-8月)までの期間を対象として、その間の激動のレバノン政治・社会の中でのヒズブッラーの政治過程に関して考察が加えられている。多くの論者(例えば [Nasr 2003])が指摘するように、レバノンにおける宗派主義的分極化傾向は、内戦中よりもむしろ内戦以降の方が顕著であると言えるが、そのような政治・社会的状況下において、ヒズブッラーが結党当初から表明してきた国民融和的思想・態度が徐々に色褪せていっていると著者は指摘する。著者によると、レバノン国民の大部分は、2000年5月のIDF撤退直後こそヒズブッラーを国民的英雄と見做していたが、シーア派以外の国民はその後徐々に同党の圧倒的な武力に対して疑いの眼差しを向けるようになっていった。そして、この傾向は特に2006年夏の紛争によって急激に加速され、現在のレバノン政治の分断と麻痺状態を準備したと指摘する。

終章で著者は、米国やイスラエルの対ヒズブッラー政策は決定的に誤っていること、レバノンの政治家は宗派主義的呪縛を乗り越え、国民統合の勇気を持つ必要があることを強調して、結論に代えている。

なお、巻末には数ページの **Additional Reading** が付されているが、これも本文同様、レバノン現代政治ないしはヒズブッラーの動向に関心を持つ者にとって、非常に親切かつ有益である。

このように本書は、先行する諸研究をまとめ直しただけではなく、そこに筆者独自の視点とデータを加えて、それらを構築し直したものでもあり、ヒズブッラーに対して総合的かつ斬新な分析が加えている。また、ヒズブッラーに対して慎重に距離を置きながら、その全体像を中立的な立場から批判的に描き出すことにも成功しており、本書における筆者の目的は十分に達成されたと言える。本書は今後も、ヒズブッラーに関する最重要リーディングスとして存在し続けるであろう。

このよう成果を踏まえた上で、ヒズブッラーに関して本書ならびに先行研究では未だに解明されておらず、今後調査・分析を要する課題を、評者の関心に引き付けて2点ほど提起しておきたい。

第一に、なぜ、ややもすれば自身の生命すらも危険に晒すような、そうでなくとも大量の時間的、金銭的、その他コストを消費するようなヒズブッラーの諸活動(例えば対イスラエル武装闘争、街頭行動、大規模ゼネストなど)に参加する人間が後を絶たないのかという問題である。本書以外の先行研究においても同様に指摘できることではあるが、ヒズブッラーの諸活動への人々の参加要因、ないしは同党の大衆動員構造を、同党の社会福祉活動の成果のみに還元することは不可能である。また、多くの論者の指摘するように、それを宗教的情熱や思想的要因のみに帰することも困難であろう。というのも、ヒズブッラーのイデオロギーに賛同はしないが、それでも同党を支持しないしは参加する人間や、宗教的实践には関心がないが、それでもヒズブッラーの熱心な支持者や構成員などが、少なからず存在するからである。この点は、今後もフィールド・ワークや聞き取り調査などにより解明が必要とされる課題であろう。

第二に、他のイスラーム主義運動組織(ムスリム同胞団、ハマースなど)や、それ以外の世界各地の社会運動や革命運動との理論的分析枠組みに基づいた比較研究の必要性である。ヒズブッラーの動態を理論的に分析し、その政治過程の全体像を明らかにするためには、この作業が不可欠であ

る。社会運動研究の専門家であるダグ・マックアダムらは以前に、欧米社会で構築された理論を専門に扱う研究者と、それ以外の地域を扱う地域研究者との間の対話や協力体制の不足を指摘し、「西洋民主主義社会と第三世界における運動の研究者たちは、それぞれ異なった語彙で語り、〔後者は〕特殊論に陥り、〔前者は〕世界の大部分を除いたデータに基づきながら、包括的な理論化が可能であると思いきやこでしまう」[McAdam, Tarrow and Tilly 1997: 143]と述べている。評者は別の論考で、この課題に対して暫定的かつ部分的な考察を行ったが〔溝渕 近刊〕、これは今後も継続的に取り組むべき課題であると言えよう。

著者が本書の冒頭で述べているように、ヒズブッラーは多様な側面と利害を併せ持つ、複雑な運動組織である。その実態は、決して「テロリスト集団」ないしは「祖国解放の英雄」といった一言の短絡的なレトリックで表現できるものではない。ただ、一つ明らかなことは、ヒズブッラーはその結党以来四半世紀にわたる活動を通じて、レバノン政治、さらには中東域内情勢や国際政治を大きく左右するまでの存在に成長したという事実である。そのようなヒズブッラーの思想や活動の動態、ならびに同党を取り巻くレバノン国内外の政治情勢を、今後も継続して注視していく必要があるだろう。

## 参考文献

- 小杉泰編 2001 『イスラームに何がおきているか：現代世界とイスラーム復興 [増補版]』 平凡社。  
 溝渕正季（近刊）『社会運動／たたかひの政治としてのイスラーム主義運動：理論的分析モデルの構築に向けて』 上智大学アジア文化研究所 Working Paper Series, No. 2。
- 吉村慎太郎 2001 「イスラーム革命と民衆文化：イラン政治変動の底流」 小杉泰編 『イスラームに何がおきているか：現代世界とイスラーム復興 [増補版]』 平凡社。
- Abū al-Naşr, F. 2003. *Ḥizb Allāh: Ḥaqā'iq wa Ab'ād*. Beirut: al-Sharika al-‘Ālamīya li-l-Kitāb.
- Alagha, J.E. 2006. *The Shifts in Hizbullah's Ideology: Religious Ideology, Political Ideology, and Political Program*. Leiden: Amsterdam University Press.
- Hamzeh, A.N. 2004. *In the Path of Hizbullah*. Syracuse: Syracuse University Press.
- Hanf, T. and N. Salam, eds. 2003. *Lebanon in Limbo: Postwar Society and State in an Uncertain Regional Environment*. Baden-Baden: Nomos Verlagsgesellschaft.
- Harik, J.P. 2004. *Hezbollah: The Changing Face of Terrorism*. London: I. B. Tauris.
- Jaber, H. 1997. *Hezbollah: Born with a Vengeance*. New York: Columbia University Press.
- Lichbach, M.I. and A.S. Zuckerman, eds. 1997. *Comparative Politics: Rationality, Culture, and Structure*. New York: Cambridge University Press.
- McAdam, D., S. Tarrow and C. Tilly. 1997. "Toward an Integrated Perspective on Social Movements and Revolution," in M.I. Lichbach and A.S. Zuckerman, eds. *Comparative Politics: Rationality, Culture, and Structure*. New York: Cambridge University Press.
- Nasr, S. 2003. "The New Social Map," in T. Hanf and N. Salam, eds. *Lebanon in Limbo: Postwar Society and State in an Uncertain Regional Environment*. Baden-Baden: Nomos Verlagsgesellschaft.
- Norton, A.R. 1987. *Amal and the Shi'a: Struggle for the Soul of Lebanon*. Austin, TX: University of Texas Press.
- Ranstorp, M. 1997. *Hizb'allah in Lebanon: The Politics of the Western Hostage Crisis*. Basingstoke, Hants:

Macmillan Press.

Saad-Ghorayeb, A. 2002. *Hizbu'llah: Politics and Religion*. London: Pluto Press.

Sharāra, W. 2006. *Dawla Hizb Allāh: Lubnān Mujtama'an Islāmīyan*, 4th ed. Beirut: al-Nahār.

Sobelman, D. 2004. *New Roles of the Game: Israel and Hizbollah after the Withdrawal from Lebanon*.

Tel Aviv: Jaffee Center for Strategic Studies, Tel Aviv University.

(溝渕 正季 上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科、日本学術振興会特別研究員)

---

**Olivier Schlumberger ed. 2007. *Debating Arab Authoritarianism: Dynamics and Durability in Nondemocratic Regimes*. California: Stanford University Press. viii+345 pp.**

ホアン・リンスが権威主義体制の定義づけを行ったのは、1964年のことである。以来、リンスが研究対象としたスペイン（フランコ体制）をはじめ、権威主義研究の主たる分析対象であった南欧、中南米諸国の大半は民主化した [Bunce 1995]。

冷戦後、民主主義は、グローバルな規範のひとつとなった。無論、国際社会で飛び交う「民主主義」という言葉も、その多くはナショナルな色彩を帯びているし、そもそも民主主義の国際的な判断基準がないため、国際機関や先進国が非民主主義国家に求める「民主化」も、外形的手続きの意味合いが強いのであるが。

とはいえ、権威主義研究が始まってから、世界のかなり多くの国が民主化したのは事実である。本書の第1章で、ジョバンニ・サルトーリと共に「民主主義の理論と経験主義的研究に重点を置きすぎる比較政治研究」に大きな影響を与えたと紹介されるアーレント・レイプハルトの著作では、1999年の時点で少なくとも51カ国が民主主義を継続しており、また「第3の波」に間に合わなかったいくつかの旧社会主義諸国も、民主化に乗り出しつつある。つまり、世界の幾つかの地域では、もはや権威主義は「歴史」となりつつある [Lijphart 1999]。

このように前置きした後、「翻って、アラブ諸国は……」と来るのが、ラリー・ダイヤモンドのような政治学の重鎮から若手研究者に至るまでの、ここ10数年の「アラブないしは中東の政治」に関するお定まりのイメージであることは言うまでもない [Diamond 1999]。アラブ連合加盟22カ国のうち、先述したレイプハルトの研究で、また厳密には民主化に限定されないが、2008年度のフリーダムハウスの基準（政治的権利と市民的自由）でも、及第点に達する国はいまだ存在しない [Freedom House 2008]。

かつてシュンペーターは、「民主主義という言葉の意味しうところは、わずかに人民が彼らの支配者たらんとする人を承認するか拒否するかの機会を与えられているということのみである（中略）すなわち、指導者たらんとする人々が選挙民の投票をかき集めるために自由な競争をなしうること、これである」と批判的に述べたが [シュンペーター 1995]、今も少なからぬアラブ諸国では、リーダーの選出とはコスメティックな茶番劇に他ならない。民主化の息吹が殆ど感じられない中、少なからぬ政治研究者が、主たる問題意識を「アラブ諸国の民主化」から、「アラブ諸国の権威主義体制の源泉」に置き代えざるを得ないのも、無理からぬことかもしれない。

\*

本書は、「アラブ権威主義体制の生命力」というテーマについて、あえて「民主化への移行」を